

7-3 新商品コンセプト創出の方法論の研究

滋賀大学 社会連携研究センター 特任教授 山本 卓

1. 研究のねらい

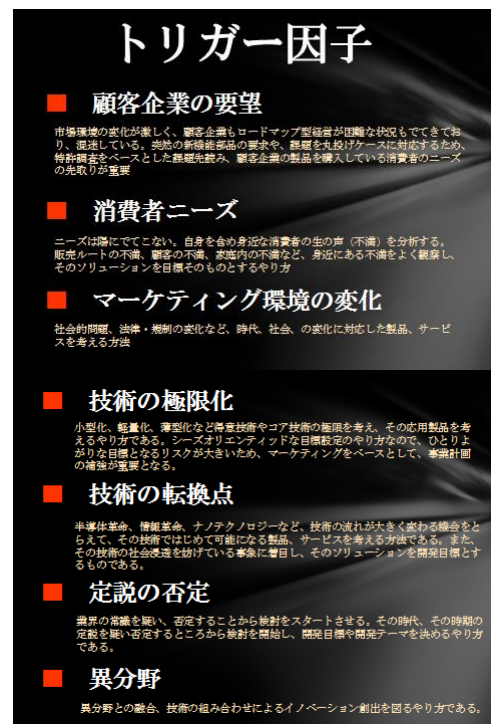
衰退する事業からの脱出に向けて、新商品コンセプトを創出して事業企画することは万人が興味を持つ対象である一方、このような価値創りのマネージメントは、まだまだ模索の段階であり、取り組みが遅れている課題である。

夢や想いから、いかにして革新的なアイデアを生み出すのか。また商品コンセプト、事業企画、造形デザインを夢物語に終わらせずに、具体的な技術要件に変換して、実際の商品化開発や要素技術開発にいかにしてつなげるのか。この課題に役に立つのが、発想(アブダクション)と呼ばれる思考法であり、これまでにアブダクションを商品開発に適用することをねらいとして、思考フローを提案してきた。しかしながら、アブダクション思考の出発点となる、夢や想い、目標や実現したい結果そのものを、どのようにすれば持つことができるのかという課題は個人の能力の問題として残されてきた。これまでも多くの発想技法、アイデア創出技法、コンセプトメイキング手法が提案されてきたが、結局はアイデアマンと呼ばれる一部の経営人材や、発想豊かな技術者、研究者の「ひらめき」に期待してきたのが実情である。

ここでは、「融合」を発想の引き金として、夢や想い、すなわち、実現したい新商品コンセプトのアイデアを生み出す方法論について研究した結果を報告する。

まず、新商品コンセプトを生み出す発想の引き金になる要因を概説する。(図1参照)

- 1) 顧客企業の要望が引き金になる。要望の先取りがポイントで、これには特許情報の活用がキーとなる。
- 2) つぎに消費者ニーズが引き金になるが、不特定多数のニーズをつかむのは困難であり、自分自身を含めた身近な消費者の不満ソリューション追求がポイントとなる。
- 3) マーケティング環境の変化とは、社会的問題、規制の変化に対応した製品、サービスを考える方法である。
- 4) 小型化、軽量化、薄型化など技術の極限を考えることもアイデア創出の重要なポイントである。シーズオリエンティッドな目標設定のため、独りよがりの目標に陥りやすい点に留意が必要である。
- 5) 技術の転換点とは、技術の流れが大きく変わる機会をとらえて、その技術ではじめて可能になる製品・サービスや、その技術の社会浸透を妨げている事象に着目し、そのソリューションを開発目標とする。現在であれば、再生医療や3Dプリンターが対象と考えられる。
- 6) 定説の否定とは、その時代の業界の常識を疑い、否定することから検討をスタートさせて開発目標を決めるやり方である。
- 7) 異分野の融合は、異質の出会いによって新しい文化や技術、発想が生み出されることを期待するもので、メディチ効果や融合というキーワードはさまざまな分野で使われている。期待感は大いだが、実際に新しいものが生み出されるかというと、うまくいってないのが現状である。



【図1 発想の引き金】

ここでは「融合」を発想の引き金として、伝統工芸にほかの技能や文化を取り入れて、活性、革新させる取り組みを紹介するとともに、そこで用いた方法論として融合発想法について報告する。伝統工芸は日本が世界に発信してゆくべき技能や、文化をかかえた大事な産業であるが、残念なことに伝統工芸と呼ばれた時点で、日常生活を支える役目から離れて行き、衰退する運命にある。衰退する事業からの脱出に向けて、新商品コンセプトを創出して事業企画することが課題となっている。伝統産業の活性化へ焦点を絞った理由は、1) 経済的価値のほかに日本のプレゼンスを支える文化的価値を包含する点、2) 確固たる技術があり、それを生かした新たな社会的価値づくりが希求されている点、3) 市場環境変化による危機感を強く持ち、迅速な開発展開へのスタートが早い点、4) わかり易い事例であり、ここで得た方法論を他展開しやすい点を考慮した。

これまでも地場の伝統工芸産業の活性化をねらいとして、外形や色のデザイン先導型の新商品開発活動がいくつか進められているが、ここではそれらの活動とは異なり、異分野の伝統工芸産業の融合による新コンセプト創出を最優先のねらいとした。


2. 融合発想法

2-1 モデル化

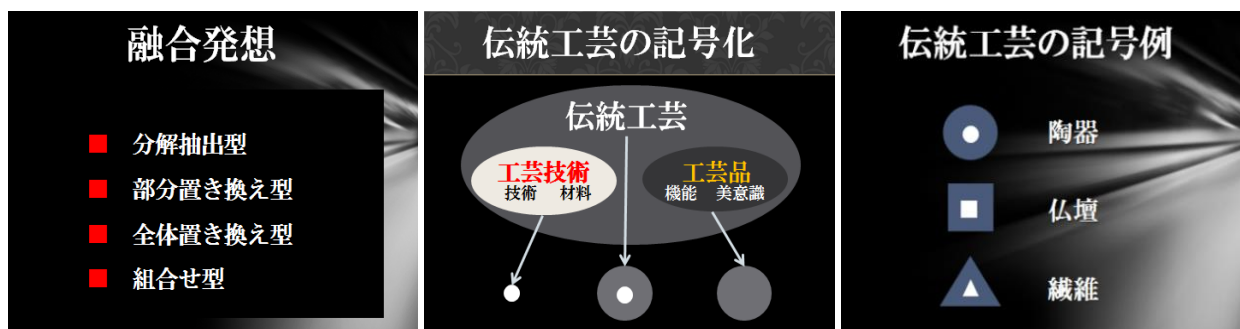
融合というキーワードから連想するものは、それを意識する人々によって様々である。AとBの融合でまったく異なるCというものを生み出す融合もあれば、芸術、文化の融合のように、部分的に他のものを取り込んで異種の風合を醸し出す融合もある。また、AとBの単なる組合せにより、AとBの複合体やその変形が生まれる融合もある。これら融合の作用を分析して、分解抽出型、部分置き換え型、全体置き換え型、組合せ型の4パターンを抽出した。

ここでは融合を発想の引き金にすることが目的であり、融合がもたらす様々な作用を類型化することで、発想の方向を多重化し、個人の限られた先入観を超えて発想を展開することが重要となる。まず、この4つの融合パターンを伝統工芸に適用し、融合パターンの実例イメージを示す。融合発想の実例イメージを示すため、まず伝統工芸をわかりやすくモデル化した。

伝統工芸を「工芸技術」と「工芸品」から構成されるものと仮定する。「工芸技術」は、そこで用いられる技術や材料を表し、記号は1例として、小さな白丸○で示す。

「工芸品」は、その機能や美意識を表す。記号は1例として大きな黒丸●で示す。そうすると伝統工芸は黒丸●に包まれた白丸○の記号  で表される。

他の伝統工芸はたとえば  で表される。(図2参照)



【図2 モデル化】

2-2 4つの融合発想パターンの実例イメージ

・分解抽出型の融合発想

工芸技術と工芸品の要素に分解、新しい価値観に基づいてその要素を抽出し統合。例としては、和傘のもつ特長、竹骨の意匠、和紙の透過光、開閉機構を照明装置に展開したもの。その美しさ(デザイン)、機能(季節によってランプシェードを交換する機能)も刷新して新しい照明空間を提案。

・全体置き換え型の融合発想

ある工芸品を、別の工芸技術で具現化。例としては、和紙陶器という名称で、壁掛け装飾用に軽量の和紙で陶器様のものを開発したもの。

・部分置き換え型の融合発想

工芸品の一部を、別の工芸技術で置き換えて一つに統合。例としては、透光陶器の一部を釉薬のかわりに漆蒔絵を彩色したもの。

・組合せ型の融合発想

伝統工芸を組合せて一つに統合。例としては、透光陶器と信楽陶器を組み合わせ、陶器の一部に光透過部を設けたもの。例としてはLED光パターンを透過させると万華鏡のように陶器(想像)となる。



【図3 融合発想のイメージ】

3. 融合発想の実践

3-1 実践体制

この4つの融合パターンを視野に置くことで、融合によるアイデアの発想を促進することが可能となる。実際に伝統工芸の新商品コンセプト作りに融合による発想を適用する狙いで、「新融合イン滋賀」研究会を発足させた。扇骨、信楽焼、和紙、仏壇、繊維、組紐の伝統工芸に携わる若手リーダーに加えて、マーケティング、エレクトロニクス、デザイン、経営、美術教育を担当するメンバーで構成した。発想を促進させるための非日常的な場所としてホテル会議室に缶詰めで、伝統工芸の融合による新商品のアイデア出しを行った。競合他社への警戒でアイデアだしが鈍るのを避けるため、各分野1人として討議を進めた。

3-2 融合発想テーブル

新融合研究会における新商品アイデアだしのバックボーンとしたのが、融合発想テーブルである。図4は融合発想テーブルの一部を抜粋したものである。右欄の縦の4列に4つの融合パターンを示し、左の欄に融合させる対象となる各種の伝統工芸の組合せを示したものである。4つの融合発想パターンの各欄に創案されたアイデアが記載される。

融合発想タイプ		分解抽出型融合	部分置き換え型融合	全体置き換え型融合	組合せ型融合
アイデアの創成	アイデアの具現化	伝統工芸の要素を分解し、新しい価値観に基づいてその要素を抽出し統合。	工芸品の一部を、別の工芸技術で置き換えて一つに統合。	ある工芸品を、別の工芸技術で具現化。	伝統工芸を組合せて一つに統合。
対象	対象	和傘、竹骨、和紙、開閉機構	透光陶器	和紙陶器	透光陶器、信楽陶器
創案者	創案者	色澤、文様、形状	漆蒔絵	漆蒔絵	漆蒔絵、透光陶器
創案者	創案者	漆蒔絵	漆蒔絵	漆蒔絵	漆蒔絵、透光陶器
創案者	創案者	漆蒔絵	漆蒔絵	漆蒔絵	漆蒔絵、透光陶器
創案者	創案者	漆蒔絵	漆蒔絵	漆蒔絵	漆蒔絵、透光陶器

【図4 融合発想テーブル(一部抜粋)】

このテーブルの使い方は、4つの融合発想パターンの各欄に抜けが無いように討議を進行させるとともに、複数回のアイデアだしにより、最終的に空欄が残らないように討議を誘導することである。結果、およそ120件の素アイデアが提案され、その中から試作イメージが明確で新規性を備えたテーマとして8件の開発テーマを抽出した。



【図5 成果展示した融合テーマ】

3-3 融合による新商品コンセプトの創出

上記の8件のテーマに、仏壇塾・開発実践プログラムにおいて仏壇工芸とエレクトロニクスの融合により創出された3テーマを加えて、計11件のテーマについて試作開発の検討を進め、この中から試作開発の進捗が顕著な7テーマを「伝統工芸の融合展」(図5参照)に成果展示した。なお、「伝統工芸の融合展」の詳細については、本報告書で別途報告した。

次に、これら7つの融合テーマについて、説明する。(図6参照)

1つめは、信楽焼と漆芸の融合から生まれた「貫入文様陶器」である。貫入(釉薬の微細なひび割れ)を積極的に文様として使った新しい信楽焼である。一般的に貫入は陶器全体にみられるが、文様として使うために、貫入の発生位置や密度をコントロールするとともに、色漆で貫入文様をさらに浮き立たせた。なお、開発担当は新融合研究会メンバーの丸滋製陶株式会社、貫入の制御に関しては、滋賀県工業技術総合センター 信楽窯業技術試験場に協力いただいた。



【図6-1 「貫入文様陶器」】

2つめは仏壇工芸とエレクトロニクスの融合から生まれた「新酒器」である。漆塗、蒔絵など仏壇の工芸技術を活かした美しい酒器に電子冷温部を融合させることで、食卓や酒席を華やかに演出するとともに、冷酒を冷たいままに保持する新概念の酒器である。



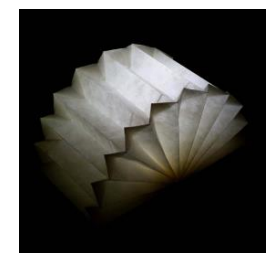
【図6-2 「新酒器」】

開発担当は仏壇製造にかかわる株式会社小川、木工旋盤技術によるケース作製は株式会社八十島プロシード、冷温部金属部品は株式会社中農製作所、冷温部電子回路は北斗電子工業株式会社に開発協力いただいた。



【図6-3 「組紐タイ」】

3つめは、組紐と鍔金具の融合から生まれた「組紐タイ」である。藤三郎紐独自の仏蘭西格子の組紐と、白金屋の鍔金具の伝統を生かしたクリップで構成した。クールビズで増えた開襟シャツスタイルの襟元を、締めずにおしゃれに演出します。



【図6-4 「Display Andon」】

4つめは、和紙とエレクトロニクスの融合から生まれた「Display Andon」である。スマートフォンやタブレット等の電子ディスプレイから放射される光を和紙に透過させて、安らぎのある、柔らかな照明空間に変える。開発担当は和紙壁紙の株式会社太陽で、滋賀県東北部工業技術センターに開発協力いただいた。

5つめは、仏壇彫刻とスマートフォンの出会いから生まれた「ケータイ彫刻」である。伝統的な仏壇彫刻の技術をベースにして、浮き彫りの極限の薄さに挑戦するスマートフォン向けのケースを開発した。開発は有限会社森彫刻所が担当した。



【図6-5 「ケータイ彫刻」】

6 つめは、仏壇工芸と扇骨の出会いから生まれた「祈り空間」である。2 つの要(かなめ)をもつ扇骨からイメージした背板と、漆工芸品の台座で構成した新しい祈り空間を提案した。開発担当は、株式会社井上仏壇、3D プリンターによるプロトタイプ試作には滋賀県工業技術総合センター、滋賀県東北部工業技術センターの協力をいただいた。



【図 6-6 「祈り空間」】

最後の 7 つめは、伝統工芸と ECO の融合で生まれた「Mottainai」である。扇子作りの際に「割れ」や「シミ」などがある不良品となった扇骨材を積み重ねて、曲げ加工により生み出した漆工芸品を提案した。開発担当は滋賀大学で美術教育に携わる隼瀬大輔氏、材料提供は SEN-KOTSU 工房に協力いただいた。



【図 6-7 「Mottainai」】

3-4 プロトタイプ試作による商品コンセプトの深化

上記の開発において、プロトタイプ試作によって開発メンバー間のコミュニケーションが進み、結果的に新商品コンセプトが深化し、コンセプトを先鋭化させることにつながった。具体例としては、「組紐タイ」では銚金具クリップが当初は装飾の機能だけであったが、試作の中で開襟シャツの襟元をクリップする構造に進化し、クールビズ市場に提案できる新商品コンセプトに深化した。また、「ディスプレイあんどん」の試作開発では、当初の固定型からスタンド型、展開型へと進展し、使用シーンを強く意識したコンセプトに進化した。「Mottainai」での試作では扇骨材の積み重ねにより、通常の木工品では出すことが難しい縞模様の美しさに気づいた。当初気づかなかった美しさを追求する方向に開発が進んだ。プロトタイプ試作は発想法とならび新商品コンセプト創出の方法論に含まれるべき、重要なプロセスと考えられる。

4. まとめ

ここでは、「融合」を発想の引き金として、夢や想い、すなわち、実現したい新商品コンセプトのアイデアを生み出す方法論について研究した結果を報告した。融合発想法は、融合がもたらす様々な作用を 4 つのパターンに類型化することで、発想を多方向化して個人の先入観を超えて発想を促進させる方法である。実際に伝統工芸の新商品コンセプト作りに融合発想を適用して、扇骨、信楽焼、和紙、仏壇、繊維、組紐の伝統工芸間の融合、ならびに伝統工芸とエレクトロニクスの融合から新商品コンセプトを生み出すことができた。ここで紹介した融合発想法は、新商品コンセプト創出に有効な方法と考えられる。また、新商品コンセプトは試作プロセスによって深化した。プロトタイプ試作は融合発想法とならび新商品コンセプト創出の方法論に含まれるべき、重要なプロセスと考えられる。

ここでは、事例がわかり易く、得られた方法論を他展開しやすい点を考慮して、地場の伝統工芸産業の活性化に焦点をあて、異分野の伝統工芸の融合による新コンセプト創出に取り組んできた。今後は、伝統工芸のほか一般の地場産業に融合発想法を適用・展開して行きたい。

《参考文献》

- <1> 米盛 裕二 「アブダクション - 仮説と発見の論理」 勁草書房
- <2> 山本 卓 「アブダクション - 発想の思考法 -」 滋賀大学 産業共同研究センター報 No.5
- <3> 山本 卓 「発想の思考法と技法」 滋賀大学 産業共同研究センター報 No.8